

教室の余韻

私が校長時代、授業中の校内を歩いていると、いつもさまざまな気付きや発見がありました。

授業中の教室にふらっと入っては、生徒と先生の活発なやり取りを見たり、教室の後ろの壁面に掲示された生徒たちの作品や掲示物を興味深く眺めたりしていました。

授業中の校内でも、歩いているといろいろな人に出会います。用務主事さんは暑い日も寒い日も、廊下や階段、校庭などを丁寧に掃除してくれています。「生徒の様子はどうですか？」と声をかけると、「生徒の皆さんがいつも挨拶してくれるのでうれしいです」「生徒さんがよくお礼の言葉をかけてくれます」などと言葉を返してくれます。

時に遅刻してきた生徒と出会うこともあれば、忘れ物を教室に取りに戻る生徒もいます。「今日はどうしたの？」「いま何の授業なの？」と私が話しかけると、笑顔で言葉を返してくれることもありました。登校渋りでお昼近くになって登校してくる生徒に出会うこともありました。別室に向かうその生徒に付き添って、「よく来たね、体調はどう？」と問いかけてみます。

調理員の皆さんは給食の時間が近づくと慌ただしさを増していきます。前の勤務校では調理員の皆さんが食缶を乗せた配膳台を各教室の前まで運んでくれました。厨房の温度は夏場になると40℃を超えることもよくあります。逆に冬場は外気と同じ凍えるような寒さです。

4時間目が終わってすべての配膳台が教室に運び込まれるまで、事故防止のためずっと廊下の端に立って見守ってくれる調理員の皆さんにはいつも労いの言葉をかけていました。

私が最もお気に入りの場所は、教室移動などで空っぽになった教室でした。特に大きな行事前の教室は、生徒たちの熱気や余韻が詰め込まれています。体育祭に向けた意気込みや決意が書かれたクラス全員のメッセージが貼られると行事が近付いてきた熱気を感じます。合唱コンクール前には模造紙に大きく印刷された自由曲の歌詞と楽譜が教室壁面に貼られ、実行委員やパートリーダーのコメントが、紙が真っ赤になるほどビッシリ書き込まれています。

そして後ろの黒板には、誕生日を迎えた友達へのお祝いメッセージや担任の先生の温かいコメントも添えられていたりします。ありふれた、でも確かな生徒たちの日常の風景がそこにあります。4月には何もなかった教室が、一年という時間を経過する中で、生命を育む生き物のようになり温かい空間に変わっていくのです。そして3月最後の登校日には「このクラスで良かった！みんなありがとう！」と仲間との別れを惜しみつつ、彼らは一回り大きく成長していくのです。